

梁啓超訳『佳人之奇遇』及びその周辺

盧 守助

はじめに

1900年6月30日、梁啓超は「紀事詩」24首を著し、彼が1899年にアメリカに遊歴した時、ホノルルで華僑の女性何蕙珍に出会ったことを詳しく記述している。これらの詩によって、彼が何蕙珍に慕情を抱いたことが明らかである。第22首に、「従今不羨柴東海、枉被多情惹薄情」という詩句があり、梁啓超は自ら海外で何蕙珍に会ったことと柴四朗（東海散士）著『佳人之奇遇』の中の主人公が幽蘭、紅蓮等の佳人に会ったことを同列に論じている¹。梁啓超はこのことを忘れ去ることができなかつたが、これは、彼の人生においては一つのエピソードにすぎなかつた。一方、彼が柴四朗（東海散士）著『佳人之奇遇』を読み翻訳したことは、書名が示すように、完全な「奇遇」であつた。戊戌変法が失敗した後、維新派のリーダーの一人であつた梁啓超は日本政府の庇護のもと、日本に亡命した。『佳人之奇遇』の翻訳について、梁啓超と共に日本の大島艦に乗って亡命した王照は次のように記している。「戊戌（1898年）八月、先生（梁啓超）は危険を免れ日本に向かつた。日本の軍艦で先生は何も所持していなかつたため、艦長は『佳人之奇遇』という本を渡し、気晴らしをさせた。先生は読みながら翻訳し、その後『清議報』に載せた。こうして軍艦に乗った時から、翻訳が始まつた」²。

原作『佳人之奇遇』の第一編第1、2巻は1885年10月に刊行されたが、最後の第八編第15、16巻が1897年10月ようやく世に問われ、前後13年間に及んだ。原作が完結を見た一年後の1898年12月、梁啓超は自ら創刊した『清議報』にこの小説の翻訳を連載し始め、『佳人之奇遇』と名づけた。この間に（1899年2月）、中国で全国を沸き立たせた冷紅生（林紓）と暁斎主人（王寿昌）が共訳した『巴黎茶花女遺事』（『椿姫』）が福州で刊行されている。小説の男女主人公の感動的な恋情の描写が、林紓と王寿昌に翻訳させた要因である。これとは異なり、梁啓超は『佳人之奇遇』から政治小説が政治的効力を備えることを意識したのである。この小説の原作者柴四朗が創作者にとどまらず、小説という道具を借りて自分の政治的見解をはっきりと述べ、そして終始政治の参与者であつたのと同じく、梁啓超も訳者というだけではなく、政治の実践者であつた。従つて、この小説の翻訳は、奇妙な現象を呈している。原作者と訳者との理念は一致する点があるが、国と立場の相違から、対立する点もあり、当時の日中両国の異なる政治観念を反映している。

梁啓超の日本亡命期間の（1898年－1912年）、小説の翻訳でも、政論でも、ないし學術の論著でも全ては政治というテーマを中心として展開されている。原作『佳人之奇遇』は全部で16

巻であり、『清議報』は35期でこの小説の12巻の始めのところで中止し、矢野竜溪著『経国美談』に代わったが、日本滞在期における梁啓超のすべての論述は『佳人之奇遇』の翻訳により始まり、そして中国近代における政治小説の導入と「小説界革命」の幕もこれにより開かれた。本論文は梁啓超が『佳人之奇遇』を翻訳したことをめぐって検討を行う。

1. 政治小説の受容

日本明治期の政治小説は、主に矢野龍溪著『経国美談』(明治16年-17年)、『浮城物語』(明治21年)、東海散士著『佳人之奇遇』(明治18年-24年)、『悲風惨風世路日記』(明治19年)、末広鉄腸著『雪中梅』(明治19年)、『花間鶯』(明治20年-21年)、須藤南翠『新粧之佳人』(明治20年)、『緑蓑談』(明治20年-21年)である。最も広く読まれ、又最も大きな影響を社会に与えたものは、言うまでもなく、東海散士の『佳人之奇遇』である。この小説の内容について、岩城準太郎は、『佳人之奇遇』は、世界を舞台として近代歴史上の事件を網羅し、亡国の辛酸を嘗めたる国民に満腔の同情を表して其の心事を描写せる者にて、維新の際、亡国の悲運を見たりし会津の遺臣東海散士が、東西に歴遊して到る処亡国の跡を弔ひ、遺民の志士に交り、北米合衆国の独立と自由と隆盛とを目にして今昔の感に堪へず。乃ち無量の感慨を吐露して多年の報復を計るに到る顛末を叙するを以て大体の脚色となす」と述べている³。日本において、『佳人之奇遇』は世界を舞台とする初めての小説だけではなく、日本人を主人公とした初めての私小説と考えられている⁴。

作者柴四朗は小説の中の主人公東海散士に化身し、そしてスペイン人の幽蘭、アイルランド人の紅蓮と清国の遺臣范卿などの登場人物を設定した。これらの人物は全て小説の第1巻で登場し、米国の「費府」(フィラデルフィア)で会い、各自の国家が滅亡した悲惨な境遇と国家を再建する政治的抱負を持つものとして描写されている。四人の愛国志士はそれぞれの国の人間であるが、共通の経歴があり、海外で会うのは確かに「奇遇」であった。この小説の巻頭に、柴四朗の心境をよく知る有待楼主人隈山谷干城の漢文で著した「佳人奇遇引」があり、「訴之天也、茫茫不答。告之入也、人不吾聽。於是乎、筆代舌、墨代涙、文字代語言、而自己告自愬、以自遣柴君憂国之志、亦可悲夫。君会津人、少長於流離患難之中。久遊学於米国、学成而帰、頗詳海外之事情、深注意於未雨之綢繆。孤憤感慨之氣、鬱積磅礴而不能而已。發為此冊子。嗟乎、使此有用之才、不能施之事業、纔借筆墨以洩其志。抑誰之咎也。読畢業慨然、書巻端」と記しており、困苦して一家離散した作者の経歴と、才能が埋もれてしまったことを述べている⁵。

梁啓超は自身が逸材であると自負して、維新運動に身を投じていた。しかしその大志はまだ実現していない。この小説を読んだ時、彼自身はまだ日本に向かう海に漂っている。小説の中の亡国の悲惨さの記述は、追放された「孤臣」と自認する梁啓超の共感を当然深く呼びさました。更に、当時の中国の知識人にとっては、外国の小説を読むのは珍しいことであった。また小説に政治と国家運命を大いに議論する場面が貫かれていることもこれまで聞いたことがない

ものであった。中国には従来小説があったが、小説の性質と効力に対する新たな認識は清末より始まった。「本館附印説部縁起」(1897年)で、嚴復は小説の使う言葉が庶民の話し言葉と大差がなく、かつ架空の事実を敷衍して、如実に事件を記録する「正史」及び事実に深い関係がある「経」、「子」、「集」と較べると、容易に大衆に受け入れられると考えている⁶。ほぼ同じ時期に、康有為は『日本書目誌』の「識語」で同じ考えを述べている。彼は、小説を読む人は数が多く、庶民の蒙を啓き、風俗改善の面からいうと、小説は通俗的な性質があり、極めて大きな効果があると考えている⁷。これと同じく、梁啓超も「变法通議」、「論幼学」で、「婦人や子どもや農民や無知な人々は皆読書は困難なことと感ずる。『水滸傳』、『三国誌』、『紅樓夢』などを読む人は「六経」を読む人より多い(中国に滞在している西洋人もよく『三国誌』を読むが、これもわかりやすいからである)」と述べ、更に多くの庶民が本を読めてこそ、初めて聖人の教誨を普及し、歴史を叙述することができると考えている⁸。以上の論述はすべて、小説を通俗的とし、容易に庶民の蒙を啓くことができるという面から考えたものである。

実は、日本に亡命する前に、梁啓超は『佳人之奇遇』を読むこともできた。万木草堂で講義をした時から、康有為は大量に日本書籍を購入し、そして『日本書目誌』を編纂した。その中には多くの日本小説を収め、東海散士著『佳人之奇遇』と『東洋之佳人』も含まれていた。1897年11月、梁啓超は『時務報』に「読『日本書目誌』書後」を掲載しているので、東海散士の二種の小説及び他の多くの日本の小説を読むことはなかったことは明らかである。これによって、日本では大量に小説を刊行され、多くの作者が輩出されたことを、梁啓超は知っていたが、それまでの中国の伝統的な固定観念にとらわれていたため、小説の重要性を意識していなかった。いわゆる政治小説及び日本における他の種類の小説の概念と知識は、日本に亡命した後、はじめて触れたのである。

日本亡命の三ヶ月後の1898年12月には、梁啓超は、はやくも自ら創刊した『清議報』第一冊で『佳人之奇遇』の翻訳を連載し始めた。これと同時に、彼は「訳印政治小説序」を著したが、これは後の『佳人奇遇』単行本の「序言」である。この文章を著したのは、梁啓超の政治小説観が初歩的段階として樹立したことを示しており、中国近代文学史上における最初の政治小説の宣言となる。この文章の中で、彼は「政治小説という種類は、西洋人より始まった。(中略)昔欧州各国における変革が始まった際には、その大学者、仁人志士は往々にして、自身の経歴及び胸中に抱えた政治的議論をすべて小説に寄託した。それで其の国々の生徒は学校の放課後、手に小説を持って読む。ないし兵士、商売人、農民、職人、車夫、婦人、子供、皆小説を手に持って読む。新しい小説が刊行される毎に、全国の議論はそれによって一変する。米、英、独、仏、オーストリア、イタリア、日本各国の政界が日に進歩するのは、政治小説の功勞が最も大きい」と述べている⁹。こうした主旨は、『佳人之奇遇』第5巻の巻頭の増島六一郎が著した「序言」の中の小説観と一致点がある。

一年後(1899年9月)、梁啓超は「伝播文明**三利器**」を著した。この文章の中で、彼は学校、

新聞、政治小説が文明を普及する三つの重要なものであると述べ、そしてこの三つのものを「三利器」と概括した。文中で彼はこうした考えを犬養毅から得たと言及している。しかし、1885年5月、坂崎紫瀾は「政治小説の効力」で、次のように述べている。「抑も西洋の政治小説なる者は彼の新聞と演説とに対して政党論戦の**三大器械**とも評せらる程のものなれば其趣味も亦高尚にして中等以上の人物をも感動するの効力ありとす」¹⁰。両者を較べると、梁啓超のいわゆる「三利器」の表現は坂崎より得たものと言え、ただ「三大器械」を「三利器」に置き換えただけである。そして、梁啓超のこの文書の文脈から見て、論述の重点は政治小説に置かれ、学校の効力には全く言及しておらず、論理的欠点がある。従って彼が述べた「三利器」は坂崎が示した新聞、演説、政治小説である。政治小説について、この文章で、梁啓超は次のように述べている。

於日本維新運動有大功者、小説亦其一端也。明治十五六年間、民権自由之声遍滿國中、於是西洋小説中、言法国、羅馬革命二事者陸續訳出、有題為『自由』者、有題為『自由之灯』者、次第登於新報中。自是泰西小説者日新月盛、其最著者織田純一郎之『花柳春話』、関直彦氏之『春鶯轉』、藤田鳴鶴之『繫思談』、『春窓綺話』、『梅蕾余薫』、『経世偉観』等。其原書多英国近代歴史小説家之作也。翻訳既盛、而政治小説著述亦潮起、如柴東海之『佳人奇遇』、末広鉄腸之『花間鶯』、『雪中梅』、藤田鳴鶴之『文明東漸史』、矢野龍溪之『経国美談』等。著書之人皆一時之大政治家。寄託書中之人物、以写自己之政見、固不得專以小説目之、而其浸潤於国民脳質、最有効力者、則『経国美談』、『佳人奇遇』両書為最云¹¹。

「三利器」と言う言葉を坂崎から得たと同じく、以上の文章は完全に『明治三十年史』の中の柳井録太郎が著した「文学」一章のものを写し取ったものである。柳井の論述は次の通りである。

十五六年頃民権自由の声かしましき折、仏蘭西羅馬等の革命に関する西洋小説の、絵入自由、自由の灯など云う新聞に掲げられしは、政治界の雲行の文学の上に映れるなるべし。是より引き続き泰西小説の翻訳切りに出でしは、当時の人心が新文学を覓望せるの徴として見るべく、將に來らむとする新小説の前表とも云ひつべし。其の二三例を挙げれば、織田純一郎氏の花柳春話を魁として、関直彦氏の春鶯轉、藤田鳴鶴が繫思談より春窓綺話、梅蕾余薫、経世偉観等なり。其原書の多くは英国近代歴史小説家の作なり。この西洋小説の翻訳は、端なくも小説革新の緒となり、是より柴東海の佳人之奇遇を初めとして、末広鉄腸の雪中梅、花間鶯、少しく純粹の小説を異なれども藤田鳴鶴の文明東漸史、矢野龍溪の経国美談等続々出で來れり。されど是等の著訳の作者は、悉く当時の政論家にして、作中の人物に借托して自己の政治上の意見を吐露するが著作の一大目的となりしが如し。さ

れは専ら文学の為にせしものとは云ひ難し¹²。

その中の『絵入自由』、『自由の灯』は雑誌名であり、梁啓超はこれをフランスとローマ革命に関する書籍名とまちがえた。柳井録太郎が「文学」を著した目的は、特に政治小説を強調するのではなく、明治の三十年に及ぶ小説の発展の歴史を記述したのである。柳井は政治小説の他に、政治小説以降の小説の変遷も述べている。彼は坪内逍遙著『小説神髓』の中の写実主義理論が導いた二葉亭四迷著『浮雲』、山田美妙斎著『夏木立』、『胡蝶』、尾崎紅葉著『色懺悔』、幸田露伴著『風流伝』、『葉末集』などの写実小説が主導的な位置を占めたことに言及する。つまり、19世紀末、日本において政治小説はすでに衰微していた。その原因について、宮島新三郎は次のように述べている。「一方に於いて文学はその独立性に自覚して、他の部門の利用に供せられることがなくなると同時に、他方、二十三年の国会開設と共に政治運動にも一段落がついて、国民の政治的興奮は沈静し、従って政治小説の翻訳創作が以前ほどには興味を惹かなくなった。先づ創作の方面では『佳人之奇遇』の第十巻が明治二十四年に出了のが最後の打ちきりであり、翻訳では末松謙澄の『谷間の白百合』の二十一年に出たのがとまりであらう」¹³。

明治後期において、日本の政治小説は一段落を告げたが、梁啓超は「伝播文明三利器」で、柳井の政治小説に関する部分だけを写し取り、当時歓迎された写実小説については口をつぐんで触れようとしなかった。これは当時の梁啓超が抱いていた政治的情熱と深いつながりがある。日本に亡命した梁啓超は自己の政治的見解を急いで鼓吹するため、坪内逍遙が唱導していた「文学以外の目的とは全く離れ、勸善懲惡をさへ小説の性質に称はず」という純文学に関心はなく、「作中の人物に借托して自己の政治上の意見を吐露する」政治小説を利器として熱心に利用した。その後の数年間も彼は全力を尽くして彼の政治小説観を押し広めようとした。1902年11月14日、梁啓超は創刊した『新小説』に「論小説与群治之關係」を掲載し、小説を「文学上の最高のものである」とした。このために、彼のいわゆる小説の効力は広げられた。彼は、「一国の民を新しくするには、一国の小説を新しくしなければならない。故に、道徳を新しくするには、小説を新しくしなければならない。宗教を新しくするには、小説を新しくしなければならない。政治を新しくするには、小説を新しくしなければならない。風俗を新しくするには、小説を新しくしなければならない。学問を新しくするには、小説を新しくしなければならない。ないし人心、人格を新しくするには、小説を新しくしなければならない」と述べている¹⁴。この文章のおわりのところで、梁啓超は「小説界革命」の宣言を提起し、「故に今日社会を改良するなら、必ず小説界革命から始まる。民を新しくするなら、必ず小説を新しくする」と述べている¹⁵。こうした論調は、彼が1902年に提唱した「新民」の思想と互いに補完している。注意すべきは、ここで梁啓超は政治小説に言及していないが、その小説観の重点を政治小説に置いていることである。『新小説』第1号の社論「中国唯一之文学報『新小説』」で、梁啓超は『新小説』を創刊する趣旨を示した。その中の一箇条は、「小説家の言論を借りて、国民の政治思想

を引き起こし、その愛国精神を激励する」というものである¹⁶。

創刊号『新小説』の中には、小説を載せる詳しい計画があり、『新中国未来記』、『旧中国未来記』、『新桃源』（別名『海外新中国』）はその例である。この計画は三つの小説の梗概を示したが、結局完結を見たものはただ梁啓超が自著した『新中国未来記』だけであった。この小説を創作する目的はやはり「区々たる政見」を表すためである¹⁷。この小説は最初から最後まで、プロットがなく、殆ど黄克強と羅在田という二人の主人公が各自の政治的見解を表す科白である。1901年、梁啓超が翻訳した『佳人奇遇』単行本は広智書局によって刊行され、1902年、商務印書館の「説部叢書」に収められ、1906年まで、6回再版された。梁啓超の『新小説』が範を垂れて、商務印書館の『繡像小説』（1903年）と後の『新新小説』なども続々と政治小説と歴史小説を載せている。小説史家阿英はこの現象について、「翻訳小説が始まった時、政治宣伝がその目的であった。故にいわゆる政治小説の風潮は盛んになった」と評している¹⁸。20世紀の初頭において、中国で翻訳し出版された日本の政治小説の主なものには、柴四朗著『佳人奇遇』（『佳人之奇遇』）、大橋乙羽著『累卵東洋』、長田偶得『日本維新英雄児女奇遇記』（『維新豪傑情事』）、矢野文雄著『経国美談』、『極楽世界』、東洋奇人著『未来戦国記』（『世界列国の行末』）、佐々木竜著『政海波瀾』（『日本政海新波瀾』）、末広鉄腸著『雪中梅』、『花間鶯』、『唾旅行』（『唾之旅行』）、押川春浪著『千年後之世界』などがある。

梁啓超は日本の政治小説を中国に伝えると同時に、政治小説の観念も導入した。当時のこうした状況について、魯迅は1927年12月に掲載した「文芸与政治的岐途」で、「以前の文芸は、別の社会を描写したようであるので、我々は鑑賞さえすれば良い。現在の文芸は、我々の自分の社会を描いており、我々も小説の中に入れる。以前の文芸は、対岸の火事を見ているように、我々と密接な関係がない。現在の文芸は、我々をその中に溶け込ませており、自らこのことを深く意識する。一旦意識したら、どうしても社会に参加しなければならない」と述べている¹⁹。そして魯迅が訳書『月界旅行』のために著した「弁言」の趣旨は梁啓超の「論小説と群治之関係」とほぼ一致している。1935年まで、上海中国書局は『佳人之奇遇』を刊行し、その重訳者田興復臨室主人は依然としてこの小説を「中国人の人心を改造する良薬として」、読者に推薦している²⁰。このことによって、当時の中国において、政治小説熱はまだ冷めていなかったと言える。こうした事情はすべて梁啓超が柴四朗の『佳人之奇遇』に「奇遇」した後に引き起こされたのである。

2. 所謂「豪傑訳」

1877年前後、日本文壇において、西洋文学作品の翻訳ブームが巻き起こった。これに伴って、原作の主題や人物や構造を勝手に改竄する現象も現れた。これはいわゆる「濫訳」あるいは「豪傑訳」である。これについて、富士川義之は、日本では、「とりわけ明治十年代に横行したそれらの翻訳は、事実、原典の文意に対して忠実でないばかりか、自分勝手な空想や小細工を適当

にまじえ文書をねじまげて翻訳するといった非良心的なものが多かった。いわゆる『濫訳』や『豪傑訳』である」と指摘している²¹。「豪傑訳」は訳者自身の観念に基づいて、あるいは読者の趣味に合わせるために改めることである。しかし、多くの場合で、「豪傑訳」は訳者の外国語能力の拙劣さと関係がある。

こうしたことは清末における中国でも、再現されていた。その時、中国では嚴復、周桂笙、曾広銓などの外国語に精通した翻訳専門家が現れたが、多くは一知半解の徒であった。また原作を読んでも殆どわからない訳者もたくさんいた。外国語の能力が低いため、原作を勝手に改竄することは魯迅の早期の訳に存在する。彼の日本東京弘文館時代の同窓は、「魯迅は読みながら翻訳し、進度は驚くほど速かった」と思い出を述べている²²。1934年、魯迅は当時の翻訳情況について自ら、「当時、私は初めて日本語を学んでいたため、日本語文法があまりはつきりわからない時、本を読みたいと思って急いた。本が読めない時、急いで翻訳したいと思った。それ故に、翻訳したものは極めて可笑しい。かつその文章はとても難解であり、とりわけ『スバルタの魂』である。現在思い出して見ると、慚愧にたえない。しかし、これは当時の風習でもあった」と反省している²³。

梁啓超の業績を集大成した『飲氷室合集』の中には、多くの翻訳作品が収められている。これらの作品には、誤訳や改竄したものがたくさんあり、中国近代史上の「豪傑訳」は彼をもって嚆矢とする。それでは、彼が『佳人之奇遇』を翻訳した情況は如何なるものだったのか。蒋林は『梁啓超「豪傑訳」研究』という著作で、梁啓超が『佳人之奇遇』を翻訳した際、中国読者の好みに迎合するために、大量に中国の古典詩詞と典故を使い、原作を完全に中国化させたと述べた。蒋氏は梁啓超の訳、第2回の中の幽蘭東海散士に答える言葉を引用して説明している。次の通りである²⁴。

(1) 郎君之涙、幸落於賤妾之衣裳、是不啻千金之賜也。譬彼婕妤唾花、不勝感謝。(中略) 夫薰以香而自燒、翠以羽而見殺、志士之处世、寧為玉碎、恥為瓦全。願蘭桂之被摧、厭蕭艾以自存。夫生而無益於世、死何以聞於後。設使与天地同寿、亦復何益。是以蹈前聖之禍機而不顧、犯災害而不悔也²⁵。

また幽蘭を描写した言葉を例として、「これは日本人の目の中のスペイン女性であるものか、明らかに曹植の目の中の洛神である」と感嘆している²⁶。その原文は次の通りである。

(2) 已有一妃待於門外。遠望之、髣髴如輕雲之蔽新月。近視之、皓潔若白鶴之立仙階、年齒二十許、盛粧濃飾、冷艷欺霜、眉画遠山之翠、鬢堆螺頂之雲。秋波凝情、炯炯射人。暗備威儀、紅頰含咲、皓齒微露、纖腰曳輕綺之長裾、蓮步踐綵繡之輕、余香襲人、徐步來迎²⁷。

蔣氏は、自ら詳しく柴四朗の原文と梁啓超の訳文を対照したと述べているが、実は蔣氏の著作は最初から最後まで、全く日本語の原文を読まずに、単に中国語の訳文により根拠なく臆測したものである。柴四朗の原文は次の通りである。

(3) 郎君の涙、賤妾が衣裳落つ、実に千金の賜、婕妤が唾花に勝る、感謝何にか譬へん。

(中略) 夫れ香は薫を以て自ら焼け、翠は羽を以て自ら傷る。志士の世に処る、寧ろ玉と為て碎くるも、瓦と為て全きを恥づ。寧ろ蘭桂と為て摧くるも、蕭艾と為て存するを厭ふ。況や、生きて世に益することなく、死して後世に聞ゆること莫くんば、螻蟻と何ぞ扱ばん。設使ひ天地と寿を等するも、亦復た何の益あらん。是れ前聖の禍機を踏で顧みず、災害を犯して悔ざる所以なり²⁸。

(4) 一妃已に出でで門頭に待つ。髣髴として輕雲の新月を蔽ふが如く、近て之を見れば皓たる白鶴の仙塔に立つが如し。年齒二十許、盛粧濃飾せずと雖も、冷艶全く雪を欺き、眉は遠山の翠を画きて、鳳鬢雲より緑に、秋波情を凝せども、炯炯人を射て暗に威儀を備へ、紅頬咲を含みて皓齒微に露はれ、纖纖たる細腰に輕綺の長裾を曳き、妍妍たる蓮歩に綵繡の輕履を踐み、余香人を襲ひ、徐歩階を下て来り迎ふ²⁹。

実は、柴四朗の『佳人之奇遇』は漢文直訳体で著されたものであり、「妾」、「郎君」などの呼称でも、また小説中の大量の中国古典詩と詞でも、中国の典故でも、すべては原作における固有のものである。これも当時の若者に愛読された原因の一つであった。これについて、徳富蘆花は、「然し佳人之奇遇の華麗な文章は協志社にも盛に愛読され、中には数多い典麗な漢詩は大抵暗記された。敬二が同窓で学課は兎に角詩吟全校第一と許された薄痘痕の尾形吟次郎君が、就寝時近い霜夜の月に、寮と寮との間の砂利道を『我所思兮在故山、(中略)月横太空千里明、風揺金波遠有声、夜蒼々兮望茫々、船頭何堪今夜情』と金石相撃つ鏗鏘の声張り上げて朗々と吟する時は、寮々の硝子毎に射すランプの光も静かに予習の黙読に餘念のない三百の青年ぶるぶると身震ひして引き入れられるやうに聞き惚れるのであった。木版片仮名まじりの字の大きい藍色の表紙をつけた和綴の其本は、協志社でも其処此処のテーブルにのって居た」と記している³⁰。徳富蘆花が挙げた漢詩は、後漢の張衡「四愁詩」をまねって作ったものである。他にも、『佳人之奇遇』の中の漢詩は田山花袋、徳富蘇峰などに深い印象を残した。

原作が現した漢文の素養は決して米国に遊学して青年期を送った柴四朗が企及することができないことである。これによって、柴四朗の小説を潤色した人がいる可能性が高いと考えられている。柳田泉の考証によれば、こうした人物は高橋太華である³¹。また高須芳次郎も「作者は東海散士とあるが、実は高橋太華の筆だと云はれて居る」と指摘している³²。高橋の素晴らしい漢文の能力が原作で体现されている。

例文(3)の中の「婕妤が唾花」の出典は『趙飛燕外伝』であり、「婕妤」は趙飛燕の妹である。「翠羽」の出典は『逸周書』であり、「蕭艾」の出典は『楚辞』である。「寧ろ蘭桂と為て摧くるも、蕭艾と為て存するを厭ふ」の出典は『世説新語』の「寧為蘭摧玉折、不作蕭敷艾榮」である。「夫れ香は薰を以て自ら焼け、翠は羽を以て自ら傷る」の出典は『漢書・龔勝伝』の「薰以香自燒、膏以明自銷」である。例文(4)の中の「眉は遠山の翠を画きて」の出典は唐代の詩人韋莊「汧陽間」の「遠山如画翠眉横」である。こうした実例は原作の中に、たくさんある。たしかに徳富蘆花が述べたように、「華麗な文章」と称すべきである。いわゆる漢文直訳体とは、巧みに漢文を仮名まじり日本語に書き換えたものである。こうした文体は梁啓超にとっては有利である。原作は「華麗な文章」と称されたが、梁啓超の訳文は、漢文を基準として較べると、一段上である。梁啓超の訳文について、「亡命客梁啓超が『清議報』紙上で一足先に漢訳を公にしたのを見ると、実に立派な、原文以上というべき名文になっているので、武田の訳の方は中止したものである」という評判があるが、過分の賛美ではないと考える³³。

前述したように、『佳人之奇遇』を翻訳し連載し始めるのは、梁啓超が日本に到着したほぼ三ヶ月後のことである。日本語を全く学んだことがない梁啓超に、この小説を翻訳することができるのか。これについて、夏曉虹は原作『佳人之奇遇』の冒頭の第一段と梁啓超の訳文を対照して説明を加えている。

東海散士一日費府の独立閣に登り仰て自由の破鐘を觀、俯て独立の遺文を読み、当時米人の義旗を挙て英王の虐政を除き、卒に能く独立自主の民たるの高風を追懐し、俯仰感慨に堪へず。愾然として窓に倚て眺臨す³⁴。

東海散士一日登費府独立閣、仰觀自由之破鐘、俯讀独立之遺文、愾然懷想、当時米人挙義旗、除英苛政、卒能獨立為自主之民、倚窓臨眺、追懷高風、俯仰感慨³⁵。

夏曉虹は、「凡そ『佳人奇遇』の原作を読んだことがある人は、容易にこの作品が典型的な漢文直訳体で書き上げられたものであることに気づく。(中略)梁啓超だけではなく、日本語が少しわかりさえすれば、その大意を推量でき、そしてこれによって解読し、上述の文を翻訳することができる」という判断を下した³⁶。確かに柴四朗の『佳人之奇遇』は漢文直訳体で書き上げられていて、中国の旧知識人なら日本語が全くわからなくても、これを読んでなんとなくわかるが、こうした判断は容易に誤解を招く。即ち日本語の語順を少し調整すれば、本場の中国語に成ると。実は、なんとなくわかることと翻訳することとは全然異なることである。『佳人之奇遇』の訳文の中に、誤訳したところがたくさんあることがその証拠である。またこうした日本語についての見解は清末以来残された考えである。

梁啓超の日本語学習について、羅普は、「己亥(1899年)春、康南海(康有為)先生がカナダに行った後、任公(梁啓超)は私を誘って勉強のため箱根へ行った。塔之沢環翠楼に住んだ

が、それは去年の冬かつて南海先生のお供をしてここに遊んだことがあったからである。(中略) その時、任公は日本書をよみたかったが、未だ仮名がわからなかった。私は中国語の文法に堪能であり、日本語にも通曉していたため、両者を融合して日本語を勉強する近道を求めるようにと勧められた」と記している³⁷。梁啓超本人は、「日本に住んで一年後には、少し日本語がわかった」と述べている³⁸。これによって、『佳人之奇遇』の訳文が『清議報』に載せられた際に、梁啓超はまだ自由に日本語の書籍を読めなかったことがわかる。しかし、『飲氷室専集』第十九巻に収められた『佳人奇遇』の巻末の「編者識」は、「任公（梁啓超）先生は戊戌（1898年）亡命し、日本に渡った。舟でこれを訳し自ら退屈しのぎとした。署名がなかった」と記している³⁹。また前掲した梁啓超の「紀事詩」第22首も「曩訳佳人奇遇成」と記している。梁啓超本人も、『飲氷室合集』を編纂した人も、皆梁啓超を『佳人奇遇』の訳者と認めている。

実際、当時の梁啓超は日本語ができなかったが、林紓が『椿姫』を訳したのとよく似ている。林紓は全く外国語ができず、他人の口授によって典雅な中国語で翻訳を行った。従って、当時の梁啓超の周辺にも必ずこのような協力者が存在したはずで、これらの人物は羅普、康孟卿、麦孟華などである。また楊維新は、梁啓超と日本人との交際について、「（梁啓超）は東京に来たばかりの時、牛込馬場下町に住んでいたそうである。その時、大隈の側近の人々、例えば犬養毅、高田早苗、柏原文太郎は（梁啓超）とたいへん親しく交際しており、彼のために熱心に日本語文法を講釈した」と記している⁴⁰。これによって、梁啓超の翻訳に協力した日本人が多かったことがわかる。梁啓超の中国語の能力ははずば抜けており、中国でも、その右に出る者はなかったのである。また『佳人之奇遇』の訳文には梁啓超のスタイルがはっきり見てとれる。したがって、原作の創作したものと訳したことは異なっているかもしれない。つまり、柴四朗が原作の草稿を出し、高田太華が潤色を加えた。多くの協力者が訳文の草稿を出し、梁啓超が添削した。これ故に、梁啓超は『佳人之奇遇』の訳者であると言えよう。ところで、梁啓超の訳文中には、誤訳がたくさんあり、原作における多くの漢詩、中国典故、和歌、割注及び東海散士の「自叙」、各巻の巻頭の「序」と巻末の「跋」はすべて削除されている。更に、小説中の范卿という人物、朝鮮問題、「興亜」などに関する論述は大量に改竄されている。従って、清末における「豪傑訳」は梁啓超の翻訳をもって嚆矢とすると見えよう。

3. 范卿という人物の登場

東海散士、幽蘭、紅蓮と同じく、范卿という人物は原作の第1巻に登場する。幽蘭と紅蓮は自分の境遇を述べた後、「清人あり、杯盤を周旋す」、「齡、大凡五旬を超ゆ。幽蘭、紅蓮の談を聞き、眉宇激するが如く、傷むが如く、襟を正して進み幽蘭を揖して曰く、今にして初めて両嬢は国家の忠臣烈女なることを知れり。老奴も亦亡朝の孤臣、漫に自ら料らず、前朝の回復を志すものなり」⁴¹。引き続き、原作第2巻の冒頭で、清人は自分の経歴を述べる。清人の姓は鼎、名は泰璉、字は范卿であり、明朝名臣瞿式耜麾下の將軍鼎璉の後裔である。鼎璉は清軍に

抵抗する戦争で戦死した。アヘン戦争で、范卿の父は英軍と戦って戦死した。1848年、明朝遺臣18人が反清の義旗を挙げ、明朝の回復を図っている。戦いに敗れた後、范卿の姉は清軍に殺害された。范卿は窮地に追い込まれて、アメリカへ亡命したが、終始「反清復明」の夢を抱いていた。

こうした叙述は翻訳では完全に削除されてしまった。このことについて、馮自由は「辛亥革命前海内外革命書報一覽」で、「この小説（『佳人之奇遇』）は、欧米に滅ぼされた国の志士及び中国の（明朝）遺民が国家を恢復することを図る物語を叙述したものである。日本人柴四朗著、羅普が翻訳し、『清議報』に載せている。単行本もある。ただその中で中国の志士が満清に反抗する一節は、康有為の命令で削除された」と記している⁴²。范卿が登場する一節を載せたのは『清議報』第四冊であり、康有為の命令で廃版にされた。翻訳で、范卿は第二回にようやく登場する。梁啓超は「范卿者、支那志士也。憤世嫉俗、遁跡江湖、与散士交最契、過從甚密」と改竄した⁴³。小説の構造上、こうした叙述は極めて唐突である。『清議報』第四冊は馮自由が記したように廃版にされたが、一部が流出し、保存された。これによれば、原作で范卿が登場する一節は大抵忠実に翻訳されていた。范卿は自分の経歴を述べる際、清朝への強い憎しみを示している。

此時に当て、満清、薙髮の令を下し、中華の文物衣冠尽く変じて夷狄の俗と為り、満人、乗勝の勢を以て老幼を殺し、婦女を辱しめ、処士を坑にし、書生を謫し、苛虐暴戾獐虎よりも猛く、間々忠義の士ありと雖も、奸臣の為めに脅されて力を展ぶる所なく、徒に言を為して曰く、暫く恨を飲み恥を忍で、時機の到るを待つべきなりと⁴⁴。

乃奉薙髮之令、而中華之衣冠文物、盡變為夷狄之俗。滿賊以乘勝之余、殺老幼、辱婦女、坑処士、謫書生、殺戮殘苛、其罪不可勝数。雖間有忠義之士、悉為漢奸賊臣之所脇、無所展力、徒為之言曰、暫為飲恨忍恥、以待時機可也⁴⁵。

その中の范卿が述べた「満清、薙髮の令を下し、中華の文物衣冠尽く変じて夷狄の俗と為り」は、当時の中国の支配者が夷狄の満清であるという事実を示している。作者は特に范卿という人物を設け、亡国の遺臣とし、そのうえ同志と為すのは、当然作者の考えを代表している。実は、こうした日本人の中国観は日清戦争後に現れたわけではなかった。清朝が明朝を滅ぼし中国を占領した後、日本において、民間ないし幕府では中華文化がすでに喪失したという考えを持っていた人は少なかった。1799年に刊行された『清俗紀聞』のために漢文で著した「序」で、述齋林衡は、「抑夫海西之國、唐虞三代亡論也、降為漢、為唐、其制度文為之隆尚、有所超軼乎萬國而四方取則焉。今也先王禮文冠裳之風悉就掃蕩、辮初髮腥膻之俗、已極淪溺、則彼之士風俗尚、實之不問可也。而子信之有斯撰、自有不得已者也」と考えている⁴⁶。康有為は保皇派であり、光緒皇帝を擁護する名義で変法を行い、当然反満の言論を許さなかったが、康有為

の弟子である梁啓超の場合は、かなり複雑であった。

日本に到着したばかりの頃、志賀重昂と筆談した梁啓超は、日本政府が光緒皇帝の復権を助けることを強く要求した⁴⁷。はじめて『清議報』に掲載された彼の文章の内容もだいたい保皇的な言論であった。ところが、反満は梁啓超の思想の底流である。時務学堂時代に、梁啓超は清朝政府が中国本土に入った時、漢人を大量虐殺した罪悪行為は全く「民賊の行為」であったとする。満清政府に反対する民族主義を鼓吹するため、彼は譚嗣同と一緒にひそかに黄宗羲の『明夷待訪録』と王秀楚の『揚州十日記』を数万冊印刷し、あわせて「批評を加えて、秘密裏に頒布して革命思想を宣伝した。それを信奉するものは日増しに増加した」⁴⁸。彼は教室で「民族感情をも憚るところなく語っていたから他ならなかった」⁴⁹。これらの活動は秘密裏に行われたため、影響力は大きくなかった。日本に亡命した後、日本語を通して間接に西洋の思想を受け入れることができるようになってから、彼の思想は新たな支点を探し始めた。彼は近代西洋の政治革命と日本の明治維新は、全て『民約論』の影響を受けていると考えて、民権論を提唱し始めた。1899年、梁啓超は『清議報』に「飲氷室自由書」を掲載して、民権と自由の説を提唱し、また「破壊主義」という文章を書いた。梁啓超の述べる破壊主義は実質的な革命主義であって、彼は革命排満のスローガンを主張した。梁啓超は、時に破壊と述べ、時に革命と述べているが、同一の概念を言い換えているだけである。破壊の対象は当然清朝政府であった。彼は「今日中国の病気を治したいと思うならば、ただ悪い政府を除き去って、別に良い政府を立てるべきであり、それによって万事うまく行く」と主張している⁵⁰。彼の革命排満の思想は極めて激しくなったのである。

清朝が中国を占領した後、歴代の支配者は苦心惨憺したが、満族と漢族の間の矛盾はまだ解決されていなかった。政権をしっかりと握るのは満清政府の目的であるのに対して、漢民族は亡国感がたえず念頭を去らず、明朝を恢復することに寄託している。満清三百余年の歴史上の蜂起は殆ど「反清復明」という名義で行われていた。原作で、范卿の父は「反清復明」事業に従事する指導者である。しかし、道光二十年（1840年）、英軍が中国を侵し、アヘン戦争が爆発した。范卿の父は、「警を聞き奮て人に謂て曰く、清朝は我が仇なりと雖も、今や兄弟牆に闘ぐの秋に非ずと。即ち勇丁を募り、舟師を督し、大いに舟山に戦て之に死す」⁵¹。范卿の父の言動はもう一つの事実を示した。すなわち、近代において、全世界に中国のように苦しい立場に置かれている国は殆どいなかった。一方、三百余年以来、中国は夷狄の満清に支配されている。他方、中国は西洋列強にばかりにされている。それゆえ、当時の漢族の有識者は、反満と西洋列強に抵抗する二重の責任を負っており、そして西洋列強に抵抗するのが当面の最も重要な任務であった。戊戌変法中、梁啓超は中国を変革する大業を光緒皇帝に託して、変法により強国となり、西洋列強に反抗することを望んでいた。変法が失敗した後、梁啓超はこの異民族の政権に失望した。彼は先ず満清政権を打倒する以外、変法が成功する道はないと考えている。したがって、『清議報』第四冊の訳文で、梁啓超は范卿の父の言動を改竄した、次の通りである。

時我父退隱於白雲山、聞警遂奮為人曰、「清朝吾仇也、誓不與共戴天。凡我同人、宜群起而攻之、以救衆生。」遂即募勇丁、督舟師、水陸併進、大戰於舟山。以衆寡不敵、力戰身亡。憶我明、朝政積弱、大臣争權。際此内憂外艱、正国家存亡之秋、応如何上下同心、同仇敵愾、解衣推食、以得士心。而不此是務、以致兆民飢寒、士愈卒怨、一戦不能支、北京遂陥、坐失四百余洲。汚辱流於千載、是可痛也⁵²。

以上の訳文の中で、梁啓超は英軍が中国を侵したことを削除し、明朝が清軍に抵抗したことに代え、明朝政府が腐敗のため、遂に滅亡したことにひどく心が痛んでいた。この他には、梁啓超は原作の中の「清朝は我が仇なりと雖も、今や兄弟牆に闘ぐの秋に非ずと」を「清朝吾仇也、誓不與共戴天。凡我同人、宜群起而攻之、以救衆生」に改竄した。こうした改竄は、当時の梁啓超の排満の主張を示している。しかし、こうした排満の主張はやがて変わった。先ず彼は満族と漢族の間には民族矛盾はないと考えていた。彼は春秋時代から、満漢両族はすでに「血族関係」にあり、秦漢三国時代には、それがさらに進んだのであり、この観点から、「満族人は事実上漢族人に同化された」と主張する⁵³。彼は、天津、両江、両広、両湖といった地域の施政者はすべて漢族人であったとする⁵⁴。それによって、彼は、満族が支配的な地位を占めていることを否認し、種族革命に反対した⁵⁵。また彼は、革命が爆発すれば、必然的に外国の干渉を招き、結局、中国は滅亡するだろうとする⁵⁶。

1903年後半からの梁啓超の政治思想は、おもにブルンチュリの学説を基礎としている。当時の中国は、満清政府の転覆と共和制の樹立という現実的課題に直面していた。この時期、梁啓超は積極的に君主立憲制（あるいは開明専制）を主張し、共和制と種族革命を否定した。「政治家伯倫知理之学説」で、梁啓超は「案」の形で、「大民族論」を提起した。彼は、ブルンチュリの民族の定義、すなわち同地、同血統、同言語、同文字、同宗教、同風俗により、再び満人がすでに漢人に同化されたと考えた⁵⁷。要するに梁啓超は、新しい国を建てるなら、満族以外の民族を排斥するのではなく、中国境界内におけるすべての民族が団結して、外国の民族の侵略に抵抗すべきであると考えたのである。彼は「これから、中国は帝国主義の略略を取り、満、モンゴル、回、苗、チベットを統合して、一大民族を結成しなければならない」と述べている⁵⁸。梁啓超のいわゆる大民族主義は当時の政治活動のための提案であったが、中国境界内の諸民族をいかに処すべきかはいかなる政党も無視することができない現実的な課題であった。梁啓超が范卿の父の言動を翻訳する際に自己の反満言論を加えた『清議報』第四冊は康有為の命令で廃版にされたが、もし『佳人之奇遇』を訳すのが数年間遅れたら、こうしたことは発生しなかったであろう。後に『佳人之奇遇』を収めた『清議報全編』と『飲氷室合集』は、いずれもこの一節を収めていないのである。

范卿は小説中の重要人物の一人であり、「反清復明」の志士でもある。しかし、如何に明朝

を恢復するののかについて、范卿は殆ど手段がなく、却って「興亜」に関心を払っている。原作第2巻で、范卿と東海散士とが互いに「興亜之策」をめぐる議論する場面がある。東海散士の考えについて、范卿は「是れ僕が胸中の密計、先生と符合す」と賛同している⁵⁹。東海散士の「興亜之策」は、「余、清朝を東に遷し、四百余洲を三分し、競争の志気を振起し、鴉片の鴆毒を禁絶せば、清人の元気を播揮し、英人が兵威を頼で印度を圧制するの財源は涸れん、是れ興亜の端緒なるべしと」である⁶⁰。梁啓超はこれを「夫支那之在大地、統四百余洲、実為宇内一大邦域。徒以内政不修、外交不講、至累受挫辱、莫能自振。果能禁絶鴉片之鴆毒、振起国民之精神、是可為興亜之第一策也」に改竄した⁶¹。彼はこれを翻訳した際に、亜細亜を振興する論調に賛同したが、出発点は完全に異なっている。彼の「興亜」の第一要務は中国を振興することである。また彼は「清朝を東に遷し、四百余洲を三分し」を削除した。

三分之策の表現の出所は諸葛孔明である。内藤虎次郎はかつて『諸葛武侯伝』を著し、専ら「草廬三顧」、「三分之策」を説明し、その目的は日本の三分の策に伏線を敷くことであった⁶²。ところが、当時の日本人の三分の策は、全世界を目標とするのである。空々子は「亜細亜の覇権を握り天下三分の策を画すべし」で、詳しく三分の策を解明した。それは、「北米合衆国は亜米利加の全土を独占する亦不可なし、若夫れ南太平洋中に横はれる大小幾多の小島嶼は、我先づ要地を占領したるの後、世界列国か其残余の地を分割占領するを妨げざるべし、此の如く我日本国は亜細亜全洲を支配し、歐洲列国は歐羅巴及阿弗利加の二大洲を支配し、北米合衆国は西半球一圓を支配し、南洋諸島は各国の分取するに任ず、天下三分の策、此に於てか成る」のである⁶³。そのうえ、彼は、「此に於て四百余洲遂に全く統一を欠き、諸豪四方に蜂起して宛然春秋戦国の態を顕出せむ」と述べている⁶⁴。即ち、中国は四百洲を擁しているが、分裂の勢いをすでに露呈しているのである。東海散士の「三分之策」は、世界を目標とするわけではなく、中国を三分にするのである。如何に三分するのか、彼ははっきり述べていない。原作第10巻で、范卿は白雲山下客と名を変えて、東海散士への書簡で、上中下三つの策を提案している⁶⁵。梁啓超の訳文はこれも削除した。范卿の三つの策は、詳しく中国の情勢を分析し、その中の中策は、「兵艦を以て仁川京城を封鎖し、清政府に迫り、名実、両ながら重くして且厚き要求を提出し、彼之を肯ぜざれば、先づ一二巡洋艦をして広東福建の沿海に出没し、市港を虚撃し、彼をして奔命に疲らしめ、更に一隊をして大同河口を遡り、平壤を窺ひ、鴨緑江より海に沿て牛莊に出で、瀋陽を襲ふの状をなさしめば、長江の南北動揺し、沿海の城市震動し、疑俱百湧、智者謀を出す能はず勇者戦ふ能はず、狼狽進退を失はん。是に於て、二十余年訓練無事に苦む日東將士を駆りて、太沽の砲壘を陥れ、天津を攻撃し、奮進城下の盟を為さしむるは真に此一挙にあり」である⁶⁶。范卿は三番目の策で、「日清元是兄弟唇齒の国なり」、「清国と攻守同盟の約を結び」、「是又興亜の大計なり」と述べたが⁶⁷、こうしたものは単に東海散士が范卿の口を借りて自己の主張を示している。小説の最後の巻（16巻）で、東海散士は、「既にして日清の戦局馬関条約に収まり、遼東半島台湾諸島、償金二億を併せて我有に帰し、日本の武威に八荒に

震はんとす」と述べ、日清戦争の勝利に頗る興奮している⁶⁸。日清戦争の結末について、東海散士は、范卿が14年前に既に予測したと賛嘆している。彼は「蓋我国振古以来、兵を海外に出すもの少しとせず。而して其遺算なく、鴻功偉烈未だ斯の如き大捷あらざるなり。然れども退きて細に之れを尋訳すれば、是れ范卿が十四年前の献策と符節を合するが如し。嗚呼亦奇なりと謂ふべし」と述べている⁶⁹。実は、これは范卿を賞賛するよりも、むしろ自己の遠見卓識を肯定している。范卿はただ東海散士の傀儡であり、代弁者でもある。

『佳人之奇遇』研究の共通点は、日本が日清戦争で連戦連勝に伴い、小説の主題と政治立場も第10巻から変わることである。つまり、小説の前半は世界の弱小民族に同情を寄せると同時に、祖国日本の前途に対して憂いを表している。ところが、この小説の後半では、朝鮮問題をめぐって、作者は日本がアジア諸国に軍事拡張主義を施すことを提唱している。小説第16巻の俠遊子、沈淪子、後楽隠士、孤憤士、青云閑人、三省老人などの日本がアジアで覇権を握るべしということに関する発言は、言うまでもなく作者の主張であった。こうしたものはすべて梁啓超の訳文では削除された。『佳人之奇遇』という小説の全体は世界を舞台として、大国に抑圧されているエジプト、アイルランド、トルコ、ポーランドなどの国に言及するが、こうした亡国の事例は作者にとって、単に教訓と歴史教科書のようなものであり、作者は自ら参与できず、また日本と密接な関係もなかった。日本の運命と利益に関する地域はアジアにある。ゆえに、いわゆる「興亜」の政策こそ当時の日本の急務であった。こうした主張は小説の第2巻から、幽蘭の口を借りて表れている。東海散士は、范卿の経歴を聞いた後、「激昂悲痛胸臆を攪す、黙然として語なく、長太息して涙を掩ひ、人生の艱多きを哀む」⁷⁰。幽蘭は彼を慰めて、「貴国旧政を蠶革し、欧の長を取て其短を捨て、米の實を撫て其花を去り、文化月に新に、富強日に進み、旧邦維れ新に、柔を守て競を執り、見る者は駭て目を拭ひ聞く者は驚て耳を傾く。其勢方に旭日の東天に昇るが如く、東洋に屹立し、聖帝與えふるに自由の政憲を以てし、人民誓て聖明に服せんことを期し、干戈已に定まり、天下安楽五穀年に豊に民業を楽み、朝鮮使を通じ、琉球内附す。方今東洋大に為すべき秋に當り、牛耳を執て亜細亜の盟主となり、東、生民倒懸の難を解き、西、英佛の跋扈を制し、南、清人が陋習を壊り、北、俄人の覬覦を絶ち、欧州諸邦が東洋を蔑視し内治に干渉し、遂に之を内属と為さんとする政略を拒ぎ、彼億兆の蒼生をして、初て自主独立の真味を嘗め、文物典章の光輝を發せしむる者は、貴国に非ずして其れ誰か之に當らん」と述べている⁷¹。こうした考えは当時日本に瀰漫していた日本をアジアの盟主と成すべきの輿論と一致している。日本はただ東方文明の先覚者と自任してだけでなく、清韓両国の誘掖者と成すべきである⁷²。たとえのちに「日清戦争」が「義戦」であるかに疑問を抱く内村鑑三でも、「日支両国の関係は新文明を代表する小国が旧文明を代表する大国に対する関係なり」と考えている⁷³。したがって、『佳人之奇遇』は、小説であるよりも、寧ろ作者の政治的意見を表した政治論文であり、当時の日本の政策と輿論を忠実に反映したものである。

明治期の政治小説について、徳富蘇峰は、「それ政治小説なるものは、小説の出来たる数多

の事情と、種々の人物とをして、知らず覺へず、隱々冥々の裏に、著者が政治上の意見を吐かしむるのみ。約言すれば即ち著者が自ら其の意見を吐かず、小説を経て、その意見を吐くものなり。然るに現今の所謂政治小説なるものは、乍ちにして一人の男兒出で来り、雄辯滔々として数千言の演説をなせば、又乍ちにして一人の婦人出で来り、又雄辯滔々として数千言の演説をなす。彼等は行為を以て演説せず、直に演説を以て演説せり。而して彼の性急短慮なる著者先生は、是れすら面倒なりとなし、遂には矢も鉄砲もたまらず、自ら幕を排ひて、講壇に現れ出て、恰も人形師が人形を使ふ如く、彼の人物等が自然のばあいには追られて、余儀なく口を発くを俟たず、勝手次第に指図をなし、其の極は彼等の演説を以て、演説するにあらずにして、却て自家の演説を以て演説するに到る。故にさもあればあれ、其の議論は巧妙なるにせよ、其の小説は実に拙劣と云はざる可らず」と述べている⁷⁴。徳富蘇峰は『佳人之奇遇』を明示していないが、この小説には演説のような説教がはびこっており、徳富蘇峰が指摘した欠点を備えている。上記の幽蘭の語りを翻訳する際、梁啓超は単に「南、清人が陋習を壊り」一句を削除し、日本がアジアでの指導権を発揮することに異議を持っていなかったようである。しかし、彼のこうした心情はやがて大きく変わる。

4. アジア主義と梁啓超の心情

1898年12月23日、維新派の新たな輿論の拠点となる『清議報』が横浜で創刊された。初期の『清議報』は変法維新時期における『時務報』の趣旨を受け継いだ。その趣旨は、「一、支那の清議を維持し、国民の正気を激発する。二、支那人の学識を増長する。三、支那と日本両国の声気を交通し、其の情誼を連ねる。四、東亜の學術を發明し、亜細亜文化の精髓を保存する」ことであった⁷⁵。しかし、『時務報』と異なる点として、『清議報』において梁啓超は、はじめて日本と連合し、共同してアジア文化を発揚するという主張を提起している。言うまでもなく、梁啓超が述べたアジア文化は日中両国間の文化を示したものである。こうした趣旨は梁啓超の発想ではなく、同年の秋、東亜会と同文会が合併して創立した東亜同文会の綱領であり、「一、支那を保全す。二、支那及び朝鮮の改善を助成す。三、支那及び朝鮮の時事を討究し実行を期す。四、国論を喚起す」というものである⁷⁶。また、1898年10月19日、山本梅崖は『大阪日清協和会』を創立したが、その趣旨は、「清国を扶植し、東亜の大局を保全することを期す」ことであった⁷⁷。協和会の設立について、梁啓超は山本梅崖宛に手紙を送り、「協和会の設立は、東方の福である」と述べている⁷⁸。なぜ、梁啓超は日本亡命後まもなく、こうした主張を示したのか。彼は「論学日本語之益」でその理由を説明した。彼は、「日本と中国は、唇齒兄弟の関係にある国であり、互いに分け隔てをなくし、提携することによって、黄色人種の独立を保ち、ヨーロッパ勢力の東漸を防ぐことができる。さらに他日、日本と中国は必ず合邦することになるため、言葉を理解し合うことが連合の第一義である。そのため、日本の志士は中国語を学び、中国の志士は日本語を学ぶことを第一義とすべきである」と述べている⁷⁹。つまり、梁啓超は

日本と同盟し、共同して西洋勢力の東漸を防ぐことを望んでいた。こうした考えは当時の社会の背景と深くかかわっていた。

日清戦争後、西洋列強は以前にも増して中国を分割し侵略し続けたため、中国は日本と連携することを渴望していた。日本に対して抱いていた悪感情が親しみに変わったのである。1898年、日本陸軍参謀部の神尾光臣大佐等は湖北省に行き、漢口で維新派の譚嗣同等と面会した際に、次のように述べている。「日中両国はもともと兄弟の国である。貴国は日本を厚くもてなしている。よもや朝鮮戦争で、ついに日中両国がかたきになるとは思わなかった。また貴国がその戦争に敗れ、收拾がつかない状態になるとも思わなかった。それ以降、西洋各国の貪欲な行為により、貴国は極めて危険な境地に陥っている。この件に関して遺憾の意を表す。それで、もし貴国が滅亡するならば、それは必ず日本にも影響を及ぼす。故に、日本は貴国と同盟しなければ、どの国と同盟するだろうか」⁸⁰。この意見について、唐才常は次のように述べている。

「今、日本人は我が国と同盟することを望んでおり、かつひそかにイギリスとも同盟して相互に支援し、命を顧みずに中国を扶植することを望んでいる。中国にとって、これこそ千載一遇のチャンスであり、この上ない幸いである」⁸¹。さらに上海の維新派は、在華日本人と共同で上海亜細亜協会を設立し、1898年4月28日、鄭観応の私邸で創立大会を開いた。小田切万寿之助は会長に推薦され、鄭観応は副会長に推薦された。鄭観応は当時、中国が日本と同盟することを熱心に主張した人物であった。彼は、中国にとって、唯一の信頼でき、頼りになる国は日本であると考えたと共に⁸²、「日本は唇齒輔車の誼、唇がなくなれば歯は寒くなる。日本は憂いを気かけ、極力して中国を維持することを望んでいる。そうなれば、これは中国の幸いだけでなく、亜細亜の福である」と述べている⁸³。また、章太炎は『時務報』で「論亜洲宜自為唇齒」という文章を掲載し、日本との「相互依存」を主張した⁸⁴。

こうした中国人の考え方は日本で生まれたアジア主義と一致しているようである⁸⁵。19世紀の末、20世紀の初めに、日本はたしかに支那と連携する熱意を持っており、日中両国が同文、同人種であると認知していた。東亜同文会の初代会長、近衛篤磨は次のように述べている。「東洋は東洋の東洋なり。東洋問題を処理する固より東洋人の責務に属す。夫の清国其の国勢大いに衰へたりと雖も、弊は政治にありて民族にあらず。直に克く之を啓発利導せば、偕に手を携へて東洋保全の事に従ふ、敢えて難しと為さず」⁸⁶。こうした情勢下に、興亜会、東邦協会、東亜同文会、東洋協会、同仁会が次々と設立された。また日本人は中国でさまざまな学校を創立し、新聞を発行した。例えば南京同文書院、東亜同文書院、北京東文学社、『亜東時報』、『閩報』、『同文滬報』、『順天時報』などである⁸⁷。これらはアジア主義のしるしとみられた。そのため、ある学者はこの時期における日中両国間の関係を「黄金十年」(Golden Decade)としている⁸⁸。日本人の言う「支那を保全する」ことは、西洋列強の鼓吹した中国を分割することと異なるため、容易に中国人の共鳴を呼んだ。山室信一によれば、日本の亜細亜観念の樹立は、18世紀にさかのぼるが⁸⁹、アジア主義の叫びが高まったのは、明治維新の成功にかかわる。伊

藤之雄は、明治維新元年（1868年）から1884年にかけて、藩閥でも、民間でも、日本では東アジアの盟主意識を定着させはじめ、日清戦争の勝利は日本のアジア盟主意識を強化したと指摘している⁹⁰。その時期におけるアジア主義の特徴は、福沢諭吉の「東洋連帯」論、樽井藤吉の大東連邦国構想、近衛篤麿の同人種同盟論、岡倉天心のアジア「解放者」である⁹¹。こうしたアジア主義は、日本の近代化が成功した背景下で、欧米列強のアジア侵略に抵抗するために生まれたものである。アジア諸民族は日本を盟主として団結せよと主張する一方、アジアを陵駕し、侵略意識も生じたのである⁹²。ところが、日本の侵略意識は明治維新が成功した後はじめて生じたわけではなかった。幕末に、佐藤信淵はすでにこのように述べている。「故ニ皇国ヨリ他邦ヲ開クハ必ず先ズ支那国ヲ吞併スルヨリ肇ル事ナリ。(中略)支那既ニ版図ニ入ルノ上ハ、其他西域、暹羅、侏離鳩舌、衣冠詭異ノ徒、漸々ニ徳ヲ慕ヒ威ヲ畏レ稽顙匍匐シテ僕ニセザルコトヲ得ン哉」⁹³。梁啓超が尊敬する吉田松陰も、同じ考え方を持っていた。彼は、「但章程を厳にし信義を厚ふし、其間を以て国力を養ひ、取易き朝鮮、満州、支那を切り随へ、交易にて魯国に失ふ所はまた土地にて朝鮮にて償ふべし」と述べている⁹⁴。1874年日本軍は台湾に侵犯した。当時の山県有朋は天皇に上書して、「此の如くなれば臣請ふ三数万の兵を率い、江蘇を蹂躪し、機に乗じて直隸に上らん。(中略)若し幸にして、我果たして勢を得るとあらば、直に天津を突き、我城下の盟を要せんのみ」と述べている⁹⁵。

1895年後、日本は日清戦争を通じて、中国から巨大な利益を得た。しかし、日本の行動は西洋列強の牽制を受けた。ロシア、ドイツ、フランス三カ国の干渉で、日本はやむなく遼東半島を中国に返還した。日清戦争の勝利は、日本挙国を奮い立たせたが、三国干渉事件は、日本人をがっかりさせた⁹⁶。自国の利益と大陸進出政策のために、日本政府は中国が完全に列強に支配されることを心配し、支那を保全することを主張した⁹⁷。これは山県有朋の対華政策から明らかである。1899年5月27日、山県有朋は、「(清国は)猶太人種の如く人種は存するも永く一国を維持すること能はざるは最早識者間の定論なるか如し仮令維持自することを得るとするも現在の版図を持続すること能はず僅か其一部分のみ保ち他は列強の蚕食するとなるべし」と指摘している⁹⁸。これにより、彼は対華の政策としておもに次の二点を挙げている。第一は、「日清会盟を結ぶが如き事は一切之を避るは勿論欧州列強をして此の如き嫌疑を抱かしめざる様十分の注意を要すること」であり、第二は、「清国の感情を害せざる様十分注意し以て機会もあらば之を逸せず我国の利益線を拡充し豫め他日の地歩を固め置く事」である⁹⁹。その時期において、日中両国は大いにアジア主義を提唱したが、実は出発点と心情はかなり異なっていた。当時のアジア主義は日本のアジア主義であり、中国のアジア主義ではなかったと言える。その時の日中両国の実力と境遇は異なっていたため、中国人は日本のアジア主義を賛同しても、往々にして受動的であった。しかし、当時の中国人はこれを意識しておらず、日本が中国を援助して西洋勢力の東漸に対して抵抗することを望んでいた。日本に亡命した初期における梁啓超も、日本の支那保全の論調に大きな望みを託していた。しかし、亡命後まもなく日本政府の救援に

対して感銘した梁啓超の心情は、日本政府が退去命令を下した後、落胆していた。それから、日本に対する彼の認識は変わり始めた。梁啓超が日本に亡命した時、日本は急速に国家主義から帝国主義に転換する時期に当たった。その時期の日本について、丸山真男は次のように述べている。「日本は周知のように明治維新による上からの革命に成功してともかく東洋最初の中央集権的民族国家を樹立し、ヨーロッパ勢力の浸潤を推しかえしたばかりか、世界を驚倒させるスピードでもって、列強に伍する帝国主義国家にまで成長した」¹⁰⁰。日本の近代化の成功と共に、日本の社会も変化し始めた。丸山は、「このように国際関係を律するより高次の規範意識の稀薄な場合には、力関係によって昨日までの消極的防衛の意識はたちまち明日には無制限の膨張主義に変化する」と指摘している¹⁰¹。こうした背景下に、梁啓超は次第に日中両国が「唇齒兄弟」の国であるという考え方を捨てた。

梁啓超は 1899 年 2 月から「哀時客」という筆名を使い始めた。まさにこの時点から、彼は意識的に日本と中国を区分した。「愛国論」(1899 年 2 月)で、梁啓超は次のように述べている。「甲午(日清戦争)前に、我国の人々は、国難を憂え、国事を議論することは、ほとんどなかった。日清戦争で、中国は敗北したため、土地を分割され、賠償金を支払い、深い痛手を負った。それ故、国を憂える人が次第に増加し、国を守る策を謀る人は至るところにいるのである。現代の方が愛国心が強いというわけではなく、昔の中国人は国が何であるかを理解しなかったのである。今、他国に敗れ、ようやく国が何であるかを理解した」¹⁰²。ここで、梁啓超が日清戦争という昔の出来事をまた持ち出したのは、他国が存在してこそ、はじめて自国が存在しているのであり、中国人が未だに愛国しないのであれば、他国から侵害され、分割されることは当然であると強調した¹⁰³。梁啓超の視点では、日本はすでに、彼が「論学日本語之益」の中で述べたように将来中国と合邦することができる国ではなく、完全に中国とは別の国であることが明らかであった。そしてその後まもなく(1899 年 9 月)、梁啓超はいわゆるアジア主義に対して批判する。「論支那独立之實力与日本東方政策」で、彼は、日本人がアジア主義を提唱する目的は、中国が分裂した後、「西洋人が中国で得た利益を分かち合う」ことであると考えていた¹⁰⁴。彼は例を挙げて、日本が福建省を自国の勢力範囲としたが、西洋列強はこれを認めず、例えばそれ以前に生じた三国干渉事件、日本が全力を尽くしても福建省における勢力範囲を保つのは、徒勞であると説明し、「支那が分裂された後、ここ(福建省)はほんとうに日本に帰属するであろうか。日本人自身も恐らく信じられないのではなからうか」と疑問を提出した¹⁰⁵。それ故に、彼は日本の有識者があらためて対華政策を考えることを望み、また日本人のいわゆるアジア主義は単なる空想であると考えていた。

また、当時の中国の朝野は日本人が提唱した支那保全論を喜んで受け入れたが、日本に身を置いている梁啓超はこれについて反論した。彼は次のように述べている。「日本人はしばしば支那を保全すると言った。私はこれまでずっとこの言葉を極端に嫌う。支那が他国の保全を要するとしても、それは成し遂げられない。支那が自身で保全するならば、他国の保全の必要がな

い。他国を保全するのは、他国の自由を侵すと言える。他国に保全してもらうことを望むのは、自由を放棄すると言える。(中略)国民のためには、独立を大事にし、権利を重んじて、他人が干渉してはいけない¹⁰⁶。また「滅国新法論」で、梁啓超は支那保全論について、次のような結論を下した。彼は、いわゆる保全政策は中国を自ら滅亡に至らせると考えていた¹⁰⁷。戊戌変法が失敗し日本に亡命した時から、梁啓超は日本とイギリスが光緒皇帝の復権を助けることを望んでいた。しかし、こうした目的を達成できないことが明らかになったため、彼はアメリカに望みを託した。彼は、「アメリカ政府が各国に出した公文によれば、アメリカは中国の領土と自主権を保全すると言っている。これは真に公明正大であり、危機を助け困難を救うことであり、ほんとうに思いやりのある君子である。(中略)アメリカはこれまで元大統領モンローの誓いの言葉を守り、アメリカ以外のことに干渉しない。(中略)我国と通商以来、我国の土地を僅かしか占領しないゆえに、特に中国人に尊重されている」と述べている¹⁰⁸。彼は日本がアメリカのように、真心を込めて中国に対応することを望んでいた。

しかし、前述したように、近代化が成功すると共に、日本の「防衛意識」は「無制限の膨張主義に変化」した。日本滞在時の最初の数年間に、梁啓超はこのような雰囲気を感じていた。彼は日本と同盟するという以前の考え方を捨てただけでなく、日本に対して警戒心を持っていた。「自由書・祈戦死」で、梁啓超は日本に対して明らかに憂いを表し、次のように記している。「冬臘の間、日本の兵營の士卒、休憩瓜代の時、余たまたま歩にまかせて上野に遊ぶ。滿街紅白の標識相接す。某師団歩兵某君、某隊騎兵某君を歓迎すと題するあり。某歩兵某君、某砲兵某君の入營を送ると題する者あり。蓋し兵卒の入營、出營の時、親友、宗族相与に之を迎送し、以て光寵と為す者なり。おおむね一兵ごとに多きは十余標、少きも四五標。其の本人は兵服を服し、昂然として道を行く。標は則ち之に前後し、親友、宗族之に従ふものおよそ数十人、其を榮耀となす。則ち我が中国人の入学、中挙、簪花の時もこれに過ぎず。其の標上、僅かに某君を歓迎す、某君を送る等の字様は、甚しく讃頌、祝禱の語なし。余中に就いて二三の標を見る。乃ち入營を送る者、題して祈戦死というの三字、余之を見て矍然肅然、流連して去ること能はず¹⁰⁹。こうした場面は梁啓超に大きな刺激を与えた。梁啓超は中国にもこの精神を望んでいた。彼は次のように結論している。「今日最も要する者は則ち中国魂を製造すること是れなり。中国魂とは何ぞや。兵魂是れなり。魂あるの兵ありて、斯に魂あるの国を為す。夫のいはゆる愛國心と自愛心とは、則ち兵の魂なり。而して將に之を製造せんと欲すれば、則ち其の薬料と其の機器となかるべからず。人民国家を以て己れの国家となすは、則ち国魂を製造するの薬料なり。国家をして人民の国家とならしむるは、則ち国魂を製造するの機器なり」¹¹⁰。中国魂を作りたいという梁啓超の思いの焦りは、彼が日本で常に帝国主義の聲の高まりを感じており、中国の未来を懸念していたからである。彼は次のように、「日本は、東方の新進の国であり、東方の雄国である。近ごろ、帝国主義の聲が全国に広がってきた。政府の大臣、政党の政治家、学校の先生、新聞社の記者、ないし西洋の学問を学ぶ知識人はみな帝国主義という言

葉をよく口にし、夢中になっており、そのやり方を研究し実施している。今日の世界は、日本人がその帝国主義をどこで行うことを認めるのか、それは必ず中国であるに違いない」と述べている¹¹¹。このように、梁啓超は、すでに日本を最大の脅威とし、早くから日本のアジア主義の本質を看破した中国人の一人となった。

5. 亡国史への研究

前に述べたように、『佳人之奇遇』中の世界各弱小国の亡国の悲運に同情を寄せる描写は、梁啓超に『佳人之奇遇』を翻訳させた誘因の一つである。日本滞在期において、亡国史への研究は彼が関心を払う主題の一つとなった。『新民叢報』1902年第6号の「紹介新著」欄で、梁啓超は亡国史研究の役割について、「建国史を読むのは、人々を感奮させ、励ますことができる。亡国史を読むのは、人々を悲しませ、恐懼させ、自ら戒めさせる。ところが、亡国に瀕する際に、その滅亡しようとする原因がまだわからなければ、建国史を読むよりも、寧ろ亡国史を読んだほうが良い」と述べている¹¹²。彼の亡国史に関する著作には『斯巴達小誌』（『新民叢書』1902年第12、13号）『雅典小史』（『新民叢報』第19号）、『朝鮮亡国史略』（『新民叢報』1904年第53、54号）、『越南小誌』（1905年）、『越南亡国史』（1905年）、『朝鮮滅亡之原因』（『国風報』1910年第22期）、『日本併呑朝鮮記』（『国風報』1910年第22、23期）などがある。実は、1896年に、梁啓超は『時務報』で既に「波蘭滅亡記」という短文を掲載し、主にポーランド滅亡の事例で、当時の中国が亡国に瀕する状態を説明し、光緒皇帝が変革を支持することを説得したのである。真に各国の亡国史へ力を集中して研究に励むのは、日本に亡命した後のことであった。『佳人之奇遇』の翻訳はその契機であり、また小説の中のエジプト亡国に関する描写は梁啓超に重要なヒントを与えた。

『佳人之奇遇』の第6巻で、紅蓮は東海散士に一冊の本を渡して読ませた。これはイギリス人の Scymour が著した *Spoiling the Egyptians* である。東海散士はこれを『埃及慘状史』と訳した。この著作はイギリスの虚偽を暴き出し、今日のエジプト惨状の根源に遡り、国王がイギリスとフランス両国の武力で廃位された物語を叙述している。ところが、真に梁啓超に触れたものはエジプトの財政と国債問題であった。財政の圧迫は、西洋列強が他国を略奪する重要な手段の一つであると意識した。「滅国新法論」で、梁啓超は外債が国家を滅ぼす新しい方法とした¹¹³。このために、梁啓超はこれに関する文章を著した。例えば「中国国債史」、「中国貨幣問題」、「外資輸入問題」、「関税権問題」、「論各国干涉中国財政之動機」、「論国民宜急求財政常識」、「外債平議」などである。エジプトの亡国事例は財政が国にとって極めて重要であることと意識した。1902年から、『清議報』は梁啓超の同窓麦孟華が翻訳した柴四朗編『埃及近世史』を連載している。後に『飲氷室合集』に収められた「中国国債史」の後ろに「埃及国債史」も附している。

エジプトなどの亡国史は梁啓超を深く悲しませ、これをもって鏡とさせたが、朝鮮の滅亡は

彼を自国の滅亡の切実な危機感を喚起させた。『佳人之奇遇』の第16巻で、作者柴四朗は孤憤子などの「交友」の口を借りて、自分の考えを表した。孤憤子は、「遼東は東洋の重地なり」と考え、日本に対する重要性を強調し、また「我征清の挙、朝鮮の独立を扶植するに在らば、宜く清をして此故土を朝鮮に還し、以て其他意なきを表し其富強に資せしむべし。日本自ら之を取るは名と義に戻るあり。唯朝鮮素より自ら之を治むる能はず、是故に日本智く代りて之を管領し、其経営に任ずべきのみ」と述べている¹¹⁴。小説の中のこれらの「交友」はその原型があり、多くの方は朝鮮王妃を暗殺したことに参与した。こうした叙述は訳文ですべて削除され、次のものに代わった。「朝鮮は、もともと中国の属邦である。属国で反乱が発生すれば、宗主国は乱を平定する義務がある。その時の朝鮮は、内憂外患こもごも至っているため、援助を求める国書を中国に提出した。中国は大義により兵を派遣し、赴援した。日本は維新の最盛期にあり、気炎万丈で、密かに東洋で挑発を企てている。(朝鮮に対して)、試しに探ってみた。日本は清廷をなめてかかりやすく、朝鮮を誘惑できると考えており、遂に朝鮮を扶植することを口実にして、清廷と恨み合うようになった。清廷はこれがわからず、今日の日本がまだ昔の日本であると考えており、日本を懲罰するつもりであり、日本が東洋で横行して騒ぎを起こすことをまぬがれる」¹¹⁵。孤憤子などの「征清」や「朝鮮を扶植する」義戦は梁啓超に「騒ぎを起こすこと」であるとされている。

1904年、梁啓超は「朝鮮亡国史略」で、柴四朗が著した「韓国之将来」について、「この二ヶ月以来、日本の輿論が対韓する研究政略は数えきれない。その中には、柴四郎氏は新たに「韓国之将来」という文章を著し、新聞紙『太陽』に載せており、それぞれの政略を総合して批評を加えた。彼が挙げたものを概括して九説を得た。甲、韓皇半面論。乙、日韓大帝国併合論。丙、顧問政治論。丁、保護国論。戊、韓国永久中立論。己、総督政治論。庚、政治放棄実業獲得論。辛、韓皇讓位論。壬、亡命客利用論」と評している。柴四朗の文章は二万字を超え、当時の日本の輿論を網羅したと言えよう。梁啓超は、当時の日本が実施している政略は前文の丁であり、すなわち保護国論であるとした¹¹⁶。

1910年8月22日、日本は「日韓併合条約」により、朝鮮を日本の版図に組み入れ、朝鮮半島は日本の領土の一部となった。僅か一ヶ月後、梁啓超は「日本併呑朝鮮記」を著した。彼は朝鮮が従来中国の属国であり、日本が朝鮮を滅ぼしたのは四つの段階に分けて進めていた。一、中国と朝鮮を争奪すること。二、ロシアと朝鮮を争奪すること。三、朝鮮を保護国とすること。四、朝鮮を併合することであった¹¹⁷。1876年、日本と朝鮮とは「江華条約」を結んだ。この条約は朝鮮が中国の属国ではないと自認させた。1885年、日中両国は「天津条約」を締結した。この条約の重点は中国が朝鮮は中国の属国ではないと承諾したことであった。「下関条約」が締結された後、中国は朝鮮が独立国であると承諾した。それより、中国は朝鮮に対する発言権を完全に失ってしまった。梁啓超は、「朝鮮を併呑するという日本の野心は、はるか豊臣秀吉から起こり、近ごろ西郷隆盛から出てきた。日本の君臣上下は、四十年以来、このことがたえず念

頭から離れなかった」と述べている¹¹⁸。また彼は、朝鮮を併呑する日本の策略を八箇条に概括し、その重要な一箇条として、「朝鮮に対する日本の謀は、数十年間、政策が一貫していた。初めから、詳細に計画し、のちに大胆に行い、極めて綿密であった」と述べている¹¹⁹。1911年3月7日に衆議院で演説した時、柴四朗は、「朝鮮は日本建国以来幾多の聖主、賢相、名将、志士が心血を注ぎ熱血を濺いで、而して尚打つて一丸とすることが出来ずして、それがためには近くは大久保、西郷或は伊藤諸公の非命に斃れましたのも、皆是は朝鮮問題の禍源から起つたことと思ひます、然るに今日允文允武天皇の御世に於て、而して今日の併合を得ましたのは本員等實に欣喜措くところを知らずして、此併合の日を以て祝日とまでも致したいと考へる位であるのであります」¹²⁰。こうした発言は、間接的に梁啓超の朝鮮に関する判断は根拠があると証明した。

朝鮮が滅ぼされたことについて、梁啓超は、「これより、中国の東に、日本の西に、黄海と日本海に突き出ている半島は再び存在しない。国家は再び存在せず、君主も再び存在せず、政府も再び存在せず、民族も存在せず、言語も再び存在せず、文字も再び存在せず、宗教も再び存在せず、法令、文物、制度も再び存在しない」と感嘆している¹²¹。朝鮮亡国の原因について、梁啓超は深い分析を加えた。彼は、確かに、日本は最大の外因であるが、「日本は苦心惨憺して他国を謀っており、鋭気を養い力を蓄えているが、本当に他国を滅ぼす能力を持っているのか。なぜ別の国を囚わず、単に朝鮮を謀るのか、他国を滅ぼさず、ただ朝鮮を滅ぼしたのか。もし朝鮮が自ら滅亡を招かなければ、百個の日本があっても、朝鮮を滅ぼすことができない。よくスイス、オランダ、ベルギーを見て、これらの国の領土の面積や人口は、遙かに朝鮮に及ばず、なぜヨーロッパの数ある強国は彼らを滅ぼせないのか」¹²²。ポーランドが滅ぼされた原因について、梁啓超はかつて、「ポーランドも自ら滅亡を招き、ロシアは彼を滅ぼさなかった」と述べている¹²³。同じく彼は朝鮮の滅亡の最大の原因は内因的であり、一、本国の政治が暗黒で社会が混乱している。二、海外留学経験を持つ人の目的は役人になることである。三、個人主義が発達し、空論を好む。四、財政が紊乱している、と指摘している¹²⁴。「朝鮮滅亡之原因」で、梁啓超は煩をいとわずに朝鮮宮廷の腐敗と中国歴史上歴代の末世の史実と対照を行った。彼は、上述した朝鮮の弊害が、同じく当時の中国に存在していると考えていた。彼は朝鮮滅亡史を研究する目的は、中国の国民に中国亡国の危機も目の前に迫っており、次の朝鮮になるだろうと訓戒を与えることにあった。

『佳人之奇遇』の中の東海散士の朝鮮に対する考えは、当時の日本の輿論と政府の政策と一致している。日清戦争で、中国の宣戦布告は「二百余年以来、朝鮮は我が大清属国である」と強調している¹²⁵。日本の「宣戦の大詔」は次のように、「朝鮮は帝国が其の始に啓誘して列国の伍伴に就かしめ独立の一国たり而して清国は常に自ら朝鮮を以て属邦と称し陰に陽に其内政に干渉し其内乱あるに於いて口を属邦の拯難に藉き兵を朝鮮に出したり朕は明治十五年の条約に依り兵を出して変に備へしめ更に朝鮮をして禍乱を永遠に免れ治安を将来に保たしめ以て東洋

全局の平和を維持せむと欲し先づ清国に告ぐるに協同事に従はむことを以てしたるに清国は翻りて種々の辞乱柄を設け之を拒みたり帝国は是に於て朝鮮に勸むるに其秕政を釐革し内は治安の基を堅くし外は独立国の権義を全くせむことを以てしたるに朝鮮は已に之を肯諾したるも清国は終始陰に居て百方其目的を妨碍し」と示し、朝鮮の独立を強調している¹²⁶。日清戦争は中国が重大な打撃を受けて終りをてきた。しかし、当時の世界の輿論は中国に同情を与えていなかった。日本の目的は何であるにせよ、朝鮮の独立を維持するという口実とするのは確かに堂々たる理由である。小説の中で、東海散士は世界の弱小国に同情を寄せ、朝鮮を中国あるいはロシアの支配下から解放したことは、当然「義戦」に属している。朝鮮の「属国」と「独立国」という問題について、梁啓超はこれが日中両国が開戦した主な原因であると考えたが、義理上いわゆる「宣戦の大詔」あるいは当時の日本の輿論に有力な反駁を行なっていなかった。朝鮮の滅亡は、梁啓超を痛恨させたと同時に、帝国主義の理論に関心を寄せさせた。彼は「およそ人間は世に生きて、必ず自存のため争う。自存を争うなら、優者、劣者の区別がある。優者、劣者があるからには、勝敗がある。劣者の権利は必ず優者に奪われる。これは国が滅亡する道理である」とする¹²⁷。社会進化論あるいは加藤弘之の強権論は、梁啓超が帝国主義を論ずる際の基礎である。彼の結論は、ポーランド、ベトナム、エジプト、朝鮮などの滅亡の惨事を避けるなら、中国が適者生存の法則により、努力して強者となるべきである。これは彼の国家主義思想の主な内容である。

日本滞在期において、梁啓超が著した大量の文章は、中国の民衆だけではなく、朝鮮の民衆にも大きな影響を与えた。彼の文章の多くは、1900年から訳され朝鮮に伝えられた。主に「清国戊戌政変記」、「匈牙利愛国者葛蘇士伝」、「伊太利建国三傑伝」、「飲氷室自由書」、「少年中国説」、「中国積弱溯源論」、「過渡時代論」、「論近世国民競争之大勢及中国之前途」、「論中国与欧州国体異同」、「国家思想変遷異同論」、「論中国今日当以競争求和平」、「滅国新法論」、「越南亡国史」などがある。その中の亡国史学の代表作は朝鮮に伝えられた後、朝鮮開化期において注目される政治思想として、のちに朝鮮人民が日本の侵略に抵抗して、民族の独立を求めることを喚起する理論の基礎となった。

おわりに

柴四朗が『佳人之奇遇』を初めて世に問うと、すぐに日本社会で注目され歓迎された。明治21年5月、佐倉政蔵は「柴四朗小伝」を著し、「一書を著し之を世に問ふ題して佳人之奇遇と云ふ其文章や婉麗流暢其結構や新奇妙案故に其書一度世に出るや洛陽紙価忽騰貴し人其書を見ざるを以て恥となすに至り氏の名是に於てか大に世に重せられたり」と記している¹²⁸。その時点で、『佳人之奇遇』はちょうど半分（4編8巻）できあがっていた。確かに「婉麗流暢」はこの小説の特徴の一つであるが、当時の日本の時勢に迎合したことが、この小説が大流行した主な原因であった。周知のように、日本の政治小説の誕生は自由民権運動と相呼応したのであ

る。戸田欽堂著『情海波瀾』（1880年）は日本における初めての政治小説と称され、副題が示すように、「民権」の「演義」である。柴四朗著『佳人之奇遇』は他の政治小説と同じく、自己の政治的意見を宣伝するものであり、小説そのものが彼の政治の道具と傀儡である。この小説は、愛国主義の情熱に満ちにあふれているが、「文学的見地から見れば、時代の反映として、時世相の写鏡として存在意義があり」、「独立した第一義の文学といふことは出来ない」、「時代に推移と共に、その力は失せていく」¹²⁹。

初めてこの小説を中国へ伝えた人物は梁啓超である。政治小説が日本の現代文学の濫觴とされたと同様、梁啓超も中国現代文学の先駆者の一人、「小説界革命」の唱導者と考えられている。日本滞在期において、彼が『清議報』や『新民叢報』や『新小説』などを創刊し、大量に訳された小説と自ら創作した小説を載せたが、多くは政治小説であった。林紘の小説翻訳と異なり、彼は最も政治上の改革に関心を払い、文学を手段として、中国政治と社会を改革するのがその目的であった。戊戌変法が失敗した後、梁啓超はやむを得ず日本に亡命した。明治期における文化は彼の思想形成に大きな役割をはたした。彼は政治、哲学、経済、歴史、文学を含む各分野の西洋思想を日本で精力的に吸収し、これらの思想を中国読者に伝えた。彼の文章は中国の若い世代に強烈な刺激と広大な共感を与え、その後の中国社会を前進させるエネルギーの発動源ともなった。梁啓超が柴四朗著『佳人之奇遇』を翻訳したことは偶然的であるが、彼の日本滞在期におけるあらゆる思想の形成と展開の出発点であると考えられる。

注

- ¹ 丁文江・趙豊田編『梁啓超年譜長編』、上海人民出版社、1983年8月、254頁。
- ² 王照「任公大事記」、『梁啓超年譜長編』、158頁。
- ³ 岩城準太郎『明治文学史』、修文館書店、昭和23年、60頁。
- ⁴ 飛鳥井雅道「政治小説と現代文学」、『思想の科学』、1959年6月、67頁。
- ⁵ 谷干城「佳人奇遇引」、東海散士『佳人之奇遇』、聚芳閣、大正14年10月。
- ⁶ 陳平原・夏曉虹編『二十世紀中国小説理論資料』（第一巻）、北京大学出版社、1989年、10-11頁。
- ⁷ 同上書、13頁。
- ⁸ 同上書、12頁。
- ⁹ 梁啓超「訳印政治小説序」、『飲氷室文集』（第一集）、雲南教育出版社、2001年8月、153頁。
- ¹⁰ 坂崎紫瀾「政治小説の効力」、『自由灯』1885年5月25日。
- ¹¹ 梁啓超「伝播文明三利器」、『飲氷室文集』（第四集）、2275頁。
- ¹² 柳井録太郎「文学」、『明治三十年史』第九編、博文館、明治31年5月、240-241頁。
- ¹³ 宮島新三郎『明治文学十二講』、新詩壇社、大正14年、65頁。
- ¹⁴ 梁啓超「論小説与群治之関係」、『飲氷室文集』（第二集）、758頁。
- ¹⁵ 同上書、760頁。
- ¹⁶ 梁啓超「中国唯一之文学報『新小説』」、『二十世紀中国小説理論資料』（第一巻）、41頁。
- ¹⁷ 梁啓超「新中国未来記」緒言、『二十世紀中国小説理論資料』（第一巻）、37頁。
- ¹⁸ 阿英『晚清小説史』、東方出版社、1996年3月、216頁。
- ¹⁹ 魯迅「文芸与政治の歧途」、『魯迅全集』（第七巻）、人民文学出版社、2005年11月、120頁。
- ²⁰ 阿英『晚清文学叢鈔・小説戯曲巻』、中華書局、1960年、415頁。

- 21 富士川義之『岩波講座日本文学史』（第11巻）、岩波書店、1958年6月、318頁。
- 22 沈應民「回憶魯迅早年在弘文学院的片段」、薛綏之編『魯迅生平資料彙編』第2輯、天津人民出版社、1983年、42-43頁。
- 23 魯迅「集外集」序言、『魯迅全集』（第七巻）、4頁。
- 24 蔣林『梁啓超「豪傑」研究』、上海訳文出版社、2009年1月、62頁。
- 25 梁啓超「佳人奇遇」、『飲氷室合集』（專集之八十八）、中華書局、1988年9月、15頁。
- 26 蔣林『梁啓超「豪傑」研究』、143頁。
- 27 梁啓超「佳人奇遇」、『飲氷室合集』（專集之八十八）、4頁。
- 28 柴四朗『佳人之奇遇』、44-45頁。
- 29 同上書、11-12頁。
- 30 徳富蘆花『黒い眼と茶色の目』、岩波書店、昭和18年、115頁。
- 31 山田敬三「漢訳『佳人奇遇』縦横談」、趙景深編『中国古典小説戯曲論集』、上海古籍出版社、1985年、396-397を参照。
- 32 高須芳次郎『日本現代文学十二講』、新潮社、大正13年、90頁。
- 33 柳田泉『政治小説研究』（上）、春秋社、1967年、381頁。
- 34 柴四朗『佳人之奇遇』、1頁。
- 35 梁啓超「佳人奇遇」、『飲氷室合集』（專集之八十八）、1頁。
- 36 夏曉虹『覺世与伝世』、中華書局、2006年、200-201頁。
- 37 羅普「任公軼事」、『梁啓超年譜長編』、169頁。
- 38 梁啓超「三十自述」、『飲氷室文集』第四集、2224頁。
- 39 梁啓超「佳人奇遇」、『飲氷室合集』（專集八十八）、220頁。
- 40 楊維新「楊維新与丁在君書」、『梁啓超年譜長編』、169頁。
- 41 柴四朗『佳人之奇遇』、35頁。
- 42 馮自由『革命逸史』第三集、中華書局、1981年、149頁。
- 43 梁啓超「佳人奇遇」、『飲氷室合集』（專集八十八）、25頁。
- 44 柴四朗『佳人之奇遇』、39頁。
- 45 『清議報』第四冊。
- 46 中川忠英輯『清俗紀聞』序、万清堂求版、明治9年。
- 47 「志賀重昂ト梁啓超トノ筆談」、『日本外交文書』第31巻第1冊、703頁。
- 48 小野和子訳『清代學術概論』、平凡社、1974年1月、270-271頁。
- 49 島田虔次訳「言論界における私の過去と将来」、『中国革命の先駆者たち』、筑摩書房、1965年、50頁。
- 50 梁啓超「論今日各国待中国之善方」、『飲氷室合集』（文集之五）、52頁。
- 51 柴四朗『佳人之奇遇』、39頁。
- 52 『清議報』、第四冊。
- 53 梁啓超「申論種族革命与政治革命之得失」、『飲氷室合集』（文集之十九）、30-31頁。
- 54 同上書、28頁。
- 55 同上書、39頁。
- 56 梁啓超「暴動与外国干涉」、『飲氷室合集』（文集之十九）、56-66頁。
- 57 梁啓超「政治学大家伯倫知理之学説」、『飲氷室文集』（第一集）、453頁。
- 58 同上。
- 59 柴四朗『佳人之奇遇』、73頁。
- 60 同上。
- 61 梁啓超「佳人奇遇」、『飲氷室合集』（專集八十八）、25頁。
- 62 内藤虎次郎『諸葛武侯伝』、東華堂、1897年。
- 63 空々子「亜細亜の覇權を握り天下三分の策を画すべし」、福島中文編『支那征伐と我国論』、文盛館、明治27年12月、92-93頁。

- 64 同上、91頁。
- 65 柴四朗『佳人之奇遇』、371頁。
- 66 同上書、367-368頁。
- 67 同上書、371-372頁。
- 68 同上書、600-601頁。
- 69 同上書、598頁。
- 70 同上書、42頁。
- 71 同上書、42-43頁。
- 72 伊澤駒吉『絵本日清戦争記』、明治27年9月、著作兼発行者、5頁。
- 73 内村鑑三「世界歴史に徴して日支の関係を論ず」、『支那征伐と我国論』、79頁。
- 74 徳富蘇峰「近来流行の政治小説を評す」、『文学断片』、民友社、明治27年、6-7頁。
- 75 「『清議報』叙例」、『飲氷室文集』（第一集）、163頁。
- 76 「対支文化施設」、東亜同文会編『対支回顧録』（上）、原書房、1981年7月、681頁。
- 77 1898年10月20日『大阪毎日新聞』。
- 78 「梁啓超致梅崖信」、『文物』1985年第10期。
- 79 梁啓超「論学日本文之益」、『飲氷室文集』（第三集）、1373頁。
- 80 唐才常「論中国宜与英日聯盟」、楊家駱主編『戊戌变法文献彙編』（三）、民国62年9月、104-105頁。
- 81 同上。
- 82 鄭觀応「亜州宜自為唇齒論」、『盛世危言』、華夏出版社、2002年10月、428頁。
- 83 「边防六」、『盛世危言』、444頁。
- 84 章太炎「論亜州宜自唇齒」、『自務報』第18冊。
- 85 近代日本の対外観の基軸をなす一つの思想的傾向で、アジアは文化的、政治的に一体であるとの心情、理念が特色。大アジア主義ともいう。現実には、アジア諸国との連帯論、西洋列強の抑圧からの解放論と、盟主日本のアジア侵略正当化論が併存していた。その端緒は幕末において本多利明、佐藤信淵らの東亜連合による西力東漸阻止論にみられるが、明治政府の西洋追随、アジア侵略の外交方針や福沢諭吉の「脱亜論」（1885年）に対して、民権論の流れから樽井藤吉は『大東合邦論』（1893年）で韓国との対等合邦と中国との友誼の提携を唱えた。しかし、日清戦争後の大勢が玄洋社-黒竜会系の盟主日本による独善的連帯、侵略論に傾くなか、終始中国国民を支援した宮崎滔天や東洋文化の多様性と優秀性を強調した岡倉天心らが注目されるものの、同人種同盟論による東洋モンロー主義を提唱した近衛篤磨のように西洋世界への対決姿勢を強めていった（『日本歴史大事典』、小学館、2000年7月、48頁。
- 86 「近衛篤磨公」、「対支回顧録」（下）、888頁。
- 87 「対支文化施設」、「対支回顧録」（上）、674-782頁。
- 88 李仲賢訳『新改革革命与日本——中国1898-1912』（Douglas R.Reynolds:China 1898-1912 The Xinzheng Revolution and Japan）、江蘇人民出版社、1998年、32-38頁。
- 89 （山室信一「アジア認識の基軸」、古屋哲夫編『近代日本のアジア認識』、緑蔭書房、1996年、6-8頁。
- 90 伊藤之雄「日清戦争前の中国・朝鮮認識の形成と外交論」、『近代日本のアジア認識』、155-159頁。
- 91 平石直昭「近代日本のアジア主義」、溝口雄三等合編『日本像』、東京大学出版会、1994年、282頁。
- 92 竹内好は宮崎滔天の思想について、次のように述べている。「滔天の当時の思想は、たぶん天賦人權と海外雄飛のロマンチックな結合だったろう。その彼からすると、荒尾精（および根津一）が『支那占領主義者』に見えたということは、侵略主義と連帯意識の微妙な分離と結合の状態を示していて興味がある。ここで、一方が連帯で一方が侵略だと性急に決めることはできない」（竹内好「アジア主義の展望」、『アジア主義』、筑摩書房、1963年8月、22頁。
- 93 佐藤信淵「宇内混同秘策」、『日本思想大系』（45）、岩波書店、1980年5月、428頁。
- 94 吉田松陰「書簡」、『日本思想大系』（54）、193頁。
- 95 徳富猪一郎「第九章征藩問題」、『公爵山県有朋伝』中巻、山県有朋公記念事業会、昭和8年2月、358頁。

- ⁹⁶ 徳富猪一郎は三国干渉について、次のように述べている。「日本人は、国民的に久し振りに——癸丑甲寅以来——三斗の苦杯を満喫した。三国干渉、遼東半島還附がそれである。当時予は遼東半島が、日本の新領土たることを知り、旅順口より営口、海城、大石橋、蓋平を踏査し、漸く旅順口に還るや、忽ち此報に接し、即日帰途に上った。携へ還ったもの、旅順口浜の沙礫一掬。曰く『是尚ほ日本の領土の一片である』と。誰下天書泣万民（たれかてんしょをくだしてばんみんをなかしむ）、遼東復見竟荆榛（れうとうまたみるつひにけいしん）。諸公謀国襟懷大（しよこうぼうこくきんくわいだいなり）、百戦山河拳附人（ひやくせんのかんかあげてひとにふす）。恐らく当時の志士は、皆予と同感であつたであらう」（徳富猪一郎「世界的一大衝動」、『昭和国民読本』、東京日日新聞社・大阪毎日新聞社、昭和14年2月、196頁）。また当時の日本人の心情について、鹿野政直はこのように指摘している。「『大国』日本（アジア諸国のなかでは）の自負と、『後進』日本（欧米列強と比べた場合）のあせりと、この二つの交錯のなかに、帝国主義突入期の日本の国家主義の特色があつた」（鹿野政直「国家主義の台頭」、橋川文三、松本三之介『近代日本思想史大系』（3）、有斐閣、1970年、290頁）。
- ⁹⁷ 『東亜同文会史』、霞山会、1988年2月、54-55頁。
- ⁹⁸ 大山梓編『山県有朋意見書』、原書房、昭和41年11月、253頁。
- ⁹⁹ 同上。
- ¹⁰⁰ 丸山真男『現代政治の思想と行動』、未来社、1963年、158頁。
- ¹⁰¹ 同上論文、『現代政治の思想と行動』、157頁。
- ¹⁰² 梁啓超「愛国論」、「飲氷室文集」（第二集）、661-662頁。
- ¹⁰³ 同上。
- ¹⁰⁴ 梁啓超「論支那独立之実力与日本東方政策」、「飲氷室文集」（第二集）、805頁。
- ¹⁰⁵ 同上。
- ¹⁰⁶ 梁啓超「自由書・保全支那」、「飲氷室文集」（第四集）、2275頁。
- ¹⁰⁷ 梁啓超「滅国新法論」、「飲氷室文集」（第二集）、732頁。
- ¹⁰⁸ 梁啓超「論今日各国待中国之善法」、「飲氷室文集」（第二集）、807頁。
- ¹⁰⁹ 梁啓超「自由書・祈戦死」、「飲氷室文集」（第四集）、2273頁。
- ¹¹⁰ 梁啓超「中国魂安在乎」、「飲氷室文集」（第四集）、2273頁。訳文は実藤恵秀『中国人日本留学史』（512-513頁）を参照。
- ¹¹¹ 梁啓超「論民族競争之大勢」、「飲氷室文集」（第二集）、797頁。
- ¹¹² 『新民叢報』、1902年第6号。
- ¹¹³ 梁啓超「滅国新法論」、「飲氷室文集」（第二集）、723頁。
- ¹¹⁴ 柴四朗『佳人之奇遇』、608-609頁。
- ¹¹⁵ 梁啓超訳「佳人奇遇」、「飲氷室合集」（専集之八十九）、220頁。
- ¹¹⁶ 梁啓超「朝鮮亡国史略」、「飲氷室文集」（第三集）、1737-1738頁。
- ¹¹⁷ 梁啓超「日本併呑朝鮮記」、「飲氷室文集」（第三集）、1772頁。
- ¹¹⁸ 同上書、1781頁。
- ¹¹⁹ 同上書、1784頁。
- ¹²⁰ 「緊急勅令の事後承諾に関する賛成演説」、『第二十七回衆議院重要問題名士演説集』（第2冊）、帝国議会要史編纂所、明治44年5月、69頁。
- ¹²¹ 梁啓超「朝鮮滅亡之原因」、「飲氷室文集」（第三集）1767頁。
- ¹²² 同上書、1770頁。
- ¹²³ 梁啓超「波蘭滅亡記」、「飲氷室文集」（第一集）、17頁。
- ¹²⁴ 梁啓超「朝鮮滅亡之原因」、「飲氷室文集」（第三集）、1769頁。
- ¹²⁵ 梁啓超「朝鮮亡国史略」、「飲氷室文集」（第三集）、1730頁。
- ¹²⁶ 「宣戦の大詔」、城北隠士編『清国征討史』、大阪：岡島幸次郎、明治27年9月、57-58頁。
- ¹²⁷ 梁啓超「滅国新法論」、「飲氷室文集」（第二集）、723頁。
- ¹²⁸ 佐倉政蔵（血涙居士）「柴四郎氏」、「民間人物論」、能勢土岐太郎、明治21年5月、55頁。
- ¹²⁹ 宮島新三郎『明治文学十二講』、63-64頁。